

# 心の悩みを受けとめるために

2007年4月

イエズス会社会使徒職委員会  
「現代日本の心の悩み」に関するタスク・チーム

## 心の悩みを受けとめるために

イエズス会社会使徒職委員会  
「現代日本の心の悩み」に関するタスク・チーム編

発行日 2007年4月 8日初版1刷  
4月27日初版2刷  
6月 6日2版1刷

発行者 イエズス会社会司牧センター  
〒162-0054 東京都新宿区河田町 7-14  
電話 03-3359-7655  
FAX 03-3358-6233  
e-mail: pyopyo@m78.com  
<http://www.kiwi-us.com/~selasj>

## 心の悩みを受けとめるために

イエズス会社会使徒職委員会  
「現代日本の心の悩み」に関するタスク・チーム編

### <目次>

はじめに	2
第1部 具体的な事例から	
教会で心の悩みを持つ人とともに歩むこと	6
カルトにはまる青年たち	14
悩み・自殺・和解	19
第2部 福音の視点から	
心の悩みとその解放の道筋	24
第3部 実践的な勧め	
更生について考える	36
スープの会 風まち喫茶に関わってきて	40
心の悩みについて「べてるの家」から学ぶ	44
おわりに	51

\*表紙・本文とも、イラスト：みやうちようこ

## はじめに

いじめ、自殺、うつ病、依存症…テレビや新聞で「心の悩み」が取り上げられない日はありません。特に2006年はいじめによる子どもたちの自殺が相次いで、マスコミはこぞって「いじめ対策キャンペーン」を展開し、政府もさまざまな対策に乗り出しました。同年10月には自殺対策基本法も施行され、各種のうつ病対策も導入されるなど、「心の悩み」はまさに、日本の最重要課題の一つとなっています。

この小冊子『心の悩みを受けとめるために』は、こうした「心の悩み」と私たちはどう向き合えばよいかを考えるために、イエズス会社会使徒職委員会の「現代日本の心の悩みに関するタスク・チーム」（以下「タスク・チーム」、英隆一朗、松井紀直、吉羽弘明、岩田鐵夫、中田久美子、堀江美帆、柴田幸範）が執筆し、イエズス会社会司牧センターが印刷・発行しました。本来、社会問題に取り組むはずの社会使徒職委員会が、なぜ「心の悩み」なのかと疑問に思う方もいると思いますので、まず、この小冊子を出すに至った経緯をご説明します。

イエズス会社会使徒職委員会は2004年10月、日本管区の全イエズス会員271名を対象に、社会問題に関する意識や取り組みについて尋ねるアンケートを実施し、73名から回答をいただきました。その回答をもとに、日本の社会使徒職が優先的に取り組むべき課題を3つに絞りました。(1) 移民・外国人労働者、(2) 地球規模のグローバルゼーション（失業・ホームレス問題、新たな貧困化の問題など）、そして(3) 現代日本の心の悩みです。(1)と(2)はすでに全世界とアジアのレベルで、イエズス会の社会使徒職の優先課題として提起されていたので、順当でしたが、(3)の「心の悩み」は、私たち自身にとっても少々意外でした。

アンケートでは最初に、「今の日本社会に暮らす人びとのどんな悲しみや苦しみに、教会は手をさしのべたらよいと感じるでしょうか」と質問したのですが、この「悲しみや苦しき」という部分に対して、回答者

の半数を超える37名が「心の問題」と回答したのです。漠然と「心の問題」と答えた方が22名、具体的な項目としては「若者・子ども」(15)、「家庭」(9)、「高齢者」(7)、「自殺」(5)、「教育」(5)、「離婚」(4)、「引きこもり」(4)、「カウンセリング」(4)、以下「自閉症」、「いじめ」、「非婚」、「ドメスティック・バイオレンス」、「生命倫理」などとなっています(重複あり)。教会司牧から大学、中高等学校、霊性に至るあらゆる使徒職の分野で、こうした問題が指摘されています。「心の悩み」が個人的なケアの範囲を超えて、一種の社会問題となっている現状が、このアンケートから図らずも浮き彫りになりました。

このアンケート結果をもとに、3つの優先課題のそれぞれにタスク(作業)・チームが設けられ、具体的な行動方針をまとめることになりました。「心の悩み」タスク・チームもイエズス会員だけでなく、さまざまな現場で働く信徒・シスターも参加して、10回を超える話し合いを持ちましたが、なかなか方向性が見いだせませんでした。

「心の悩み」と大雑把にくくっても、それぞれの悩みの内容や背景が千差万別であること。とはいえ、こうした多種多様な悩みの背景には共通して、当事者の個人的な問題だけでなく、その人たちが生きにくくさせている社会状況が存在すること。一方で、当事者が望んでいるのは社会変革ではなく、まず自分が直面する苦しみからの解放であること。このような「心の悩み」の性質を考えると、従来の社会運動の「構造分析→組織化→社会変革」という方法論がどこまで有効か、確信が持てなかったからです。

さまざまな角度から話し合った末、たどりついたのは次のような柱です。

1. 現場に関わり、個別の当事者に関わるのが不可欠です。「心の悩み」はデータ分析によって解明され、解決されるべき抽象的な「問題」ではなく、当事者一人ひとりの人生の問題だからです。

2. 問題を報告するばかりでなく、成功事例を伝える必要があります。当事者が必要としているのは理論や理想ではなく、希望と具体的なヒン

トだからです。その意味で、専門家の論文よりも、当事者による「自助グループ」のような取り組みを紹介する方が有効な場合もあるでしょう。

3. 「心の悩み」は当事者の問題である以上に、社会の問題です。現代社会に「心の悩み」が増えているのは、「問題を持つ」人が増えたというよりも、より多くの方が生きにくくなるような「社会の歪み」が増大したせいです。分析され、解決されるべき「問題」があるとすれば、それは当事者の問題ではなく、私たち自身も含めた周囲の社会の問題に他ならないのです。

このような方針に沿って企画されたのが、今回の小冊子です。内容は、上記の3つの柱に沿って、(1) 具体的事例、(2) 福音的視点、(3) 実践的な勧めの三部からなっています。この冊子はどなたにもお読みいただきたいのですが、特にアンケートに答えてくださったイエズス会員をはじめ、「心の悩み」に関心がある方、まわりに当事者がおられる方、支援者の方を念頭に書かれています。当事者の方が読まれると、分かり切ったことや誤解、中途半端な記述も多いと思いますが、おゆるください。

この小冊子はこれで完結ではありません。「心の悩み」は多種多様です。読者の皆さんからご意見やご感想、「こんな問題について、こんな取り組みをしている」といった情報をいただき、さらに多くの問題に取り組んでゆければと思います。前述のように、「心の悩み」は使徒職の枠を超え、教会、学校、霊性など、すべての現場で協力して取り組まれるべき課題です。イエズス会だけでなく、日本の教会全体が、そうした協力の場を必要としています。この小冊子が、そのきっかけの一つとなれば幸いです。

教会や学校、その他のグループでまとまった数をお使いになる場合は、実費(1部100円、送料別)でお送りいたしますので、お気軽にご注文ください。

ご注文・お問い合わせは、下記までお寄せ下さい。

イエズス会社会司牧センター／柴田  
〒162-0054  
東京都新宿区河田町7-14  
FAX. 03-3358-6233  
E-mail:pyopyo@m78.com

イエズス会社会使徒職委員会  
「現代日本の心の悩み」に関するタスク・チーム

2007年4月

\*本書では、引用部分や法令などの固有名詞を除いて「しょうがいしゃ」を「障がい者」と表記しました。

## 第1部 具体的な事例から

### 教会で心の悩みを持つ人とともに歩むこと

#### 1. 教会と「心の悩みを持つ人」－教会の現状の分析から

##### 1) 「心の悩み」をどうとらえるか

「心の悩み」とは何だろうか。

今日のような必要以上に効率性を求められる社会では、様々な局面での効率性への適応を求められる。その適応への必要が、ある人の限界を超えた時、人は時に「自分の存在価値のなさ」に苦しんだり、心の病に倒れたり、時には悲しいことに、苦しみの果てに自らの「面倒さ」に疲れ果て自ら命を絶ったりすることもある。あるいは別の形、たとえば激しく感情を表しトラブルになる事態にも出会う。

現代社会は、居場所を探し、さまよう時代といえるのかもしれない。人と人との関わりの希薄さは、他者への気遣いを小さいものになっている。それは単に個人の責任というより、社会構造の転換や、個別化することによって個人を切り離すという社会の姿の投影とも言えるのかもしれない。人とかかわりの希薄さは、人の心をさらに苦しいものにする。こうして、人の心のうちを苦しくするものが「心の悩み」といえるだろう。

こうした「心の悩み」に対して、「甘えている」という意見をよく聞く。「みんな苦しいのだ、それを越えることによって人は成長できるのだ」といった文脈で。要するにそれは「苦しくてもがまんしろ」ということだと思う。

しかし国会（参議院厚生労働委員会）でさえ、「心の悩み」のとりわけ自殺について、「自殺を『自殺する個人』の問題だけに帰すことなく、

『自殺する個人を取り巻く社会』に関わる問題として、自殺の予防その他総合的な対策に取り組む必要がある」（「自殺に関する総合対策の緊急かつ効果的な推進を求める決議」2005年）としていて、今日の自殺は単に個人に帰結できるものでないことをいう。これを受けて2006年には「自殺対策予防法」が施行されるに至っている。

自殺の多くは「心の悩み」に起因する。とすれば、多くの、今現実にある「心の悩み」も先に示した社会的な要因が背景にあるといえるだろう。それは家庭の問題、労働の問題、地域の問題、病の問題や複合的な要因などと様々だろう。ここ最近、自殺する人が年間3万人を超え、精神障がい者として手帳を持つ人、精神障がい者ではないが精神科の外来に通う人、あるいは医師の診療を受けることなく苦しんでいる人を含めると、一体どれだけの人が「心の悩み」で苦しんでいるのだろうか。

## 2) 教会はどう苦しむ人と付き合ってきたか

「心の悩み」を抱えるある人は、キリスト教教会に期待をかける。教会に行けば何かが変わるかもしれないと。キリスト教の一般的なイメージには、「親切・親身」というイメージがあるからである。そうして神父や牧師らに話をしようと、多くの人が教会を訪問したり、電話をかけてくる。

なぜこの人たちは、教会を訪れるのだろうか。多くの場合、心も、体も本当の居場所がなくて、不安定になってしまったからなのではないだろうか。苦しさを、何らかの形で対処しないと自分が壊れてしまう。自らの存在意義を感じたいのは、人の根本であろうから、自分の「立つ位置」を確認したいと考えるのは当然だろう。「今の自分でいいのか」、「どうしたらこの苦しみを解決できるのか」などの確認のために、何かを優しさのうちに示してくれると期待して教会にやってくるのだ。

大抵の人は、「こんなことに負けてはいけない」と、これまで何らかの形で「がんばって」きている。信徒の場合はさらに複雑で、「神にゆだねていない」とますます苦しくなっている。

しかし教会はそれに対処できる手段や方法をあまり知らない。だから、さらにがんばるように勧めたり、さらに「ただ」神様にゆだねるように勧めたり、あるいは教会の「所掌範囲外」としてあいまいな態度を取ったりすることも少なくない。または、その人に必要なことを見極められずに、まったく見当違いの「援助」をして共依存になるケースも少なくない。これらの勧めは、あまりうまくいかないこともある。そうするとますますがんばり、ますます傷つき、あきらめて絶望的になって自らにこもったり、何らかの行き違いが起こったりする。

どの教会も同じ条件ではないだろうが、しかし少なからず教会にとっては、彼らの期待とは裏腹に、はっきりいってこのようなケースは「面倒」だと思っている場合もあるらしい。「心の悩み」の苦しさに伴うのは、そんなに簡単でない、その人自身が解決できないているのだから。だから、自分の支えを求めてずっと話しこんだり、ちょっとしたトラブルになったりすることもある。教会も、一般的な偏見から逃れられず、そういう人を「おかしな人」とひとくくりにして暗に、あるいははっきりと教会に来ないようにしむけたりすることがある。

カトリック東京教区は、2002年に出した『福音的使命に生きる』において、三つの課題のうちの一つに「心の病や心の傷を負った人々へのサポート」を課題として挙げている。この文書を受け、東京教区再編成プロジェクトチームは最近の教会について、「この社会を生きる人にとって教会の存在意義が見えにくくなっているということなのです。別の言葉で言えば、今この時代のこの社会の中で、教会が『救いのしるし、救いの道具』になっていないということです。」とし、また心の悩みや傷ついている人への教会のあり方を述べる。ここで強調されるのは専門性ではなく、むしろ教会が変わること、すなわちこうした病や悩みを抱える人を受け止められるメンタリティーを持てるような教会に「戻していくこと」に重点が置かれる。

このことはとても大切なことだ。しかし一方で、この課題に疑問を持つ人も少なからずいる。「ああいう人が引き起こす大変さを知らない」とか、「何をするか分からない」と身構えて防衛的にとらえる人もある。それはそうだろう。どうしてそういう苦しみにさいなまれるのかを知らない人に、どう接していいのか分からず、時にはトラブルが起きて憎しみに近い感情を抱いているのに、「受け入れましょう」と言っても反発が起きるのは必至である。

## 3) 「真っ白なシャツ」と教会

問題は、単に「方法」を知らないだけに留まらない。教会特有ともいえるべき、「汚されたくない」という意識が働くことから来る。今の教会を見ていると、「教会は真っ白なシャツだ」という類の「幻想」を持っているように感じられる。真っ白なシャツは、買って来たときにはも

ちろん鮮やかな白である。しかし着ているうちに、食事で汚れたり、汗でしみができたりと、汚れに直面する。そこで一生懸命に漂白剤を使って、汚れを落とそうとする。面倒な作業である。しかしやがて汚れが繊維に染み込んで、漂白剤は有効でなくなる。あきらめと怒りを感じる。

教会は、どうやら漂白された真っ白さが無いといけないようだ。「心の悩み」などといった現代の問題との直面を避けようとする。問題は「白くない」から。教会は神聖な祈りの場であって、現代の直面している問題を取り上げるところでないと考える人さえいる。教会の「雰囲気」が壊れたり、あるいはトラブルが起こったりするのは困る。そこで、問題になるようなものを排除しようとする。「愛」を生きることを指針にする教会の信徒は、そこに時に落ち着けない彼らに「敬虔なクリスチャン」という暗黙の基準からの逸脱者として叱責や非難の対象にするスティグマを与える、と北海道・ベテランの家の向谷地生良氏（プロテスタント教会信徒）はいう。

今日の教会は、まさしく福音書に登場するイエスの弟子たちのようだ。イエスが救いのために歩む中、多くの癒しを求める人が集まってくる。弟子たちは、時に押し寄せてくる癒しを求める人たちに無関心だったり（五千人の供食、長血の女など）、叱り付けたり（子どもたちへの祝福）して、イエスを「守ろう」とする。弟子の意向は、イエスに付き従いたい想いでいっぱいなのだが、イエスの想いをきちんとくみ取ることができない。

## 2. いかに「心の悩み」を持つ人とかわるか

「心の悩み」を持つ人は、先に示したようにあまり正面から受け止められないことがない。非難、叱責、嘲笑の種にされることもしばしばだ。苦しいからどうしてもギクシャクとした関係となることも多くて、相手には「付き合いづらさ」を感じさせることもあり、時間を取られるという理由もあり、あまり関わりたくないとも思う人は少なくない。しかしこれだけ多くの苦しむ人が教会を訪れるということは、今の教会は彼らの「居場所」として求められているのである。しかしそれに気付かず、悩みに応える方法を知らないから種々の相手の苦しさ巻き込まれるし、だから嫌な人だとレッテルを貼ることになるのだろう。それだから、

教会に来ると困るのである。

となると、まず今教会に不足しているのは、心の悩みとは何なのかを知る「一人一人の専門性」ではないだろうか。「専門性」というと、カウンセラーや医師などを思い浮かべる。しかし先に示した東京教区の方針にあらわれる、このような状態に置かれて苦しんでいる人の状況を一人一人が知ることが基盤になるかもしれない。

同時に、先に示したように、困難を抱える人々の「危機介入」などに対しては、ある種の専門性を必要とする場面も往々にしてある。こうした問題は、単にその人の「心のケア」に留まらず、医療や社会福祉的な面でのかかわりを要するときも多い。しかし日本の教会がこうしたことに対応できる人を抱えているという話を、あまり聞かない（もちろん少数の機関や、個人の努力があることは認識している）。欧米の教会では、こうした専門性を有している者が教会に常駐しているケースも少なくないと聞く。

そこで教会は、今は段々と各教会で増えているカウンセラーのほか、社会福祉士や精神保健福祉士（ソーシャルワーカー）などの専門職の人のかかわりが必要だと思われる。もちろんすべての「心の悩み」を持つ人が、こうした人々とかかわる必要はない。しかし、今日の教会の「不幸」の一つは、彼らの状況を見極められる専門職の人がいないことから来る不適切な対応である。これに対処できる人の下において、情報を共有することで状況を見極め、個々の人の受ける専門的なかかわりを一定にしていくことができる。また、かかわりにおいて困難に感じた時、当事者にとっても、いわゆる援助者となっている信徒、神父、修道者、牧師らにとっても助けになるだろう。

つまり、ごちゃごちゃになってしまったすべてをまとめる存在の必要を感じるのだ。

これらは何も大きな組織になる必要もない。ただ、困難が両者あるいは一方に起きたときに、問題が当事者やかかわる人を行き詰まらせることがないように、ネットワークを構築することが必要になるだろう。そのネットワークを通して、適切な、困難に対する「行き先」を見出すことができる仕組みが大切になるだろう。同時に、そこに根本となる霊性も必要になるだろう。

### 3. 「共生」できる教会をめざして

#### 一心を開いて「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」

イエスは多くの病の人を癒す。かけつける人々の想いは、現代、教会を訪れる人と共通のものがあるのではないだろうか。すなわち、どうにもならなさを抱えて、その突破口を探し遂に教会に出会ったのかも知れない。日本における宗教の現状や評判は必ずしも芳しいものではない。それにもかかわらず、救いを求め教会を訪れる人たちの存在に、神の介在を見ないわけにいかない。

多くの「心の悩み」は「静かな苦しみ」である。しかし時として、それが自分でも抑えられなくなり、多くはないがトラブルになることもある。特に怒りまくる、いわゆる「爆発系」の人への対処に苦心しそれを恐れるから、「心の悩み」は疎んじられる。精神障がい者に対する差別も同じ構造だろう。

誤解してはいけないのは、こうした「爆発」を含む「心の悩み」は多くの場合、脳の機能や、今まで生きてきた歴史の中で傷ついてきたことなどがバックグラウンドにあるということだ。普通に生活する中で、何らかのストレスや自分との関係の不具合を起こす等の根拠があって「悩み」「苦しみ」が発生するのであって、決して勝手気ままなものではない。

「勝手気まま」という見方をされると一彼らはこういうことに人一倍敏感だから一、さらにそれをカバーしようと別のアクションを起こし、問題は社会的常識や価値観とますます乖離を起こし、余計自分自身を追い込んでしまうのである。そうした一連の出来事を、勝手だと非難して排除の対象にしても、あまり解決にならないだろう。第一、イエスは苦しむ人にどう対処してきたのだろうか。

もちろん、少ないながらも何らかの問題が起きた時、その責任を当事者がとらないといけない時があるのは当たり前の話である。何をやっても、それを何でも許容するようになっていないのではない。例えば、教会の備品を壊したら、それを元通りにしてもらおうようにするのは当然だ。ただし、それを警察がするようにやるのではなく、その人とともに考え、そこからの気付きを通してすることが必要なのである。「ここは病院や施設でないから知りません」ではすまされない。法律でさえ、国民に「精

神障害者に対する理解を深め、及び精神障害者とその障害を克服して社会復帰をし、自立と社会経済活動への参加をしようとする努力に対し、協力するように努めなければならない。」と義務づける（「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」）。ましてイエスに従おうとする教会であること、そして心の苦しみを持つ人が地域や、少なくとも教会で過ごすことのできるようにするにはどういうスタンスを取るべきか、教会も地域の一員として考えないといけないだろう。だから、専門職の人の存在やかかわりは必要なのだ。

ベースとしては、当たり前であるが、当事者を腫れ物にさわるようにするのではなく、恐れることなく、恐れる必要もなく、普通に尊厳ある人として尊重して見つめること。後述する、風まち喫茶やべてるの家は、その参考になるだろう。

実は、教会の一人一人のできることは、教会にそのような「空気」を取り戻していくこと、教会が悩みにかかわる苦しみや悲しみといった感情をぶつけても大丈夫な場所へと取り戻していくことではないだろうか。これが「居場所」となり、彼らをも安心させる。教会は「自分だけの安全地帯」ではない。教会共同体は他者とともに感謝し、祈り、他者の苦しみの分かち合い、他者とのかわりを通して神とつながっていく場所だ。神はこうしたかわりを通して私たちを「安心」へと導いておられる。どんな人も最終的に一緒に心から笑えるような雰囲気がある場所は、安心できる所だ。今の教会は、妙に笑いがないところではないだろうか。そこで人は安心できるだろうか。「時に自分も苦しみながら、苦しむ人とともに歩む安全地帯」なのだ。

またこれも大きなポイントだが「心の悩み」の解決に、定められた期間はない。だから、いつも同じ悩みや、時に同じトラブルが起こる可能性もある。そうであっても、個人で背負いきれない苦しみがあることに心を向けられるメンタリティーを教会が持つこと、そしてどうであってもその人はその人の価値があることを共同体が伝える、あるいはそのような「空気」を満たすことも必要となるだろう。

2006年2月の病者の日に、教皇ベネディクト16世は主に精神障がい者についてのメッセージを送った（カトリック中央協議会訳）。ここでは「世界の五分の一の人たちが精神障害に苦しんで」いて、「世界

中の精神障害者が置かれている状況を熟慮し、彼らに対する神の深いいつくしみをあかしするように、教会共同体が取り組むことを求める」とする。

そして病者、特に精神障がい者は、しばしば家族や共同体の重荷とされ、疎外されており、それに対する社会的な資源が十分でないことを示し、「適切な治療」と「障害に対する新しい感性」とのよりよい統合を求める。

教会に対しては、司牧者と種々の組織の取り組みとともに、「心の病をもつ人を受け入れ、その苦しみを分かち合う精神がはぐくまれ、広がること、またその結果として、十分な資源を具体的に用いることを含んだ、適切な法律や保健事業計画が打ち出されること」を望み、彼らのために働く人の養成と研修が緊急に求められているとする。さらに、「すべてのキリスト者は、それぞれの固有の任務と責任に応じて、わたしたちのこのような兄弟姉妹（精神障がい者—引用者注）の尊厳が認められ、尊重され、促進されるように働くことを求められています。」としている。

「障害に対する新しい感性」とは、今まで述べてきたような教会を安心できる居場所にすることもかもしれない。どんな「心の悩み」を持つ人も、後述のべてるの家の例を見ると、症状の悪化は関係の悪化から来ることが多いことが分かる。逆に、他者が自分を分かってくれているということが彼らの支えになっているのだ。

一人で彼らとの問題を解決しようとするから、「心の悩み」を持つ人との関係が困難になるのである。人には限界があるのだから。専門職の人も含めた教会共同体がその人を包み込むこと。その仕組みを作ること。教会に、「心の嵐」を避けられる場所が考えられてもいいかも知れない。それは例えば自助グループ、カウンセリング室や、専門職の人もいる逃げ場になるいつでも安心して泣ける部屋など。こうして包み込むことが、いつしか教会共同体が忘れてしまったかのようにみえる「喜び人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ロマ12、15）を、今、分かち合うことなのだろう。

祈りと、積極的な「心の悩み」を持つ人への理解と支えが、教会共同体と一人一人に求められている。

## カルトにはまる青年たち

### <はじめに>

現在私はイエズス会の大学のキャンパスミニストリーに奉職していて、5年目になる。大学の典礼行事のコーディネーター、講演会や写真展の主催、学生からの相談、キリスト教入門講座の開催などが主な仕事の中で、最も比率の高いのが学生相談の業務である。相談内容も人間が違うように様々ではあるが、その中でも大きなウェートを占めているのは「カルト」についての相談である。家族がカルトに入ったようだ、友達が入った、自分が勧誘された、など。あまりに多いので、現在は『日本脱カルト協会』の会員になり、そこから最新の情報を得るようにしている。

今回は、これまでのいろいろな体験をもとに感じていることを書いていきたい。

### <1 「カルト」とは何か>

「カルト」という言葉は、もともとは宗教の営みのことを表しているが、現在は新興宗教団体をさすようになり、更にその中でも反社会的で破壊的、閉鎖的なものを言う。またマインド・コントロールを使用するのが特徴である。マインド・コントロールは、相手の心を変えることであり、本人には自発的に納得して行なっていると思わせ、洗脳よりも恐い。ちなみに、洗脳というものは、本人が望んでいないのに強引に本人の思想を変える方法であり、私もあるカルト団体の幹部により洗脳されかけた経験がある。

カルトの問題点は、入会・退会の自由がない、金銭的負担が大きい、良いことをやっているように見せかけて別の目的に利用しようとしている、教祖や集団のエゴに利用され宗教とは全く関係のないことをしている実態である。

これらのカルト団体に入ってしまったって苦勞を背負う学生は、年々増加の一途を辿っている。カルトに関する相談は通常のカウンセリングとは違い、本人の生活及び人生全般に影響を及ぼすデリケートな問題であるので、私の場合、月に数件、1年でも20件程度を扱えるに過ぎない。



カルト団体に入ってしまうとそこから抜け出すのは長期戦になるので、1つのケースが解決するまでに数年かかることもままある。

## < 2 何故青年はカルトにはまるのか >

日々学生たちと出会っていると、何年たっても大学の中に自分の居場所が見つけれない学生が多いように感じる。一人暮らしで淋しいと感じたり、新しい生活や勉強に不安を感じていたり、学部学科の雰囲気になじめずなかなか友だちも出来ないでいると、それが苦痛となり、重苦しい毎日に耐えられなくなり、押しつぶされそうになる。そのような時、同世代の人間が笑顔で近寄り、暖かく接してきたら、心を許してしまうだろう。その見せかけの笑顔にひっかかってしまうのである。自分に友だちができた、自分の居場所を見つけた、と錯覚し、そのためにはコンサートだろうとビデオ上映会であろうと行ってみよう、積極的に活動して新しい自分に生まれ変わろう、と誤ってしまいがちなのである。もしくは、すぐに断るのは悪いという思いから、ずるずるとその団体との関係を続けてしまい、結局はまり込み、マインド・コントロールを受けて、完全に所属してしまう。

そうなるともう脱会することなどは考えられない。この団体と出会うために自分は生きてきたのだ、この団体があったから自分は救われたのだ、と確信しているのだから、団体から抜け出すことは破滅であり、地獄に落ちるという恐れにとらわれ、逆に勧誘に熱心に励むことになる。その結果、学業はおろそかになり、家族との連絡も途絶え、ひたすら「世の中の人を救われるため」に、団体活動に精を出す。しかも自分の貯めていたお金や仕送りはすべて団体に寄付し、徐々に大学にも通わなくなり、悪循環の道を進むことになる。

自分の居場所欲しさ、友だち欲しさを埋めるためにカルトに手を出した結果、自分自身をも破壊させる生活にはめられ、偽の居場所、友だちづきあいになってしまうのである。

## < 3 どうすれば脱会できるか >

脱会できる時期は2度あるようだ。1度目はカルトに入ってから間もない初期の段階である。団体と関わりをもった後で、自分の中でその活動や

理念に対して何か釈然としないものを持ち、友だちなどに話し、友だちからアドバイスを受け、私のところへ来て、情報を得ることにより、団体の怪しさに気づき、脱会を決断するケースである。この場合は脱会もわりと早く、本人の立ち直りも早い。

2度目は団体に所属し、活動に定期的に参加するようになってから、ある日偶然その団体に疑問を感じる時である。疑問を感じるきっかけは自分の恋愛に団体が口を挟んできた時であったり、団体でのトラブルであったり、団体の掟に疑問を感じたり、と様々なことである。それで私のところへ相談に来るが、団体の所属期間が長ければ長いほど、団体が当人を放したがないので、状況がややこしくなるケースが多い。本人が脱会したいという強い意志があれば可能だが、意志が弱い場合は団体に責められると元に戻ってしまう。また脱会できたとしても立ち直るのに非常に時間がかかり、フラッシュバックに苦しむ状況も続く。

## < 4 事例 >

- ① ある秋、1年生のA君が空いている教室で一人で昼食をしていたところ、学生と思われる人が近寄ってきて「ゴスペルコンサートの会場はどこか知らない？」と聞いてきた。A君は未だ友だちが出来ず、また学科の雰囲気にもなじめず悶々としていたので、「一緒にコンサートに行こう」と誘われた時、嬉しくなつてついていった。一つの教室に入ると韓国人の歌手がいてコンサートが始まった。休憩になると3人の大人が近寄ってきて、住所や名前、学科を聞いてきた。彼らのフレンドリーな態度に心を許し、思わず教えてしまった。コンサート終了後、「今度は別の場所でコンサートがあるから、絶対に来て」と言われ、携帯番号やメールアドレスをしつこく聞いてくる。根負けして教えてしまうとその後、毎日このグループの誰かから電話が来て、いくらこちらが「その日は無理だ」と言っても向こうは引き下がらない。そんなやり方に嫌気がさして、カトリックセンターへ相談。一つのカルト団体と判明したので、携帯番号、メールアドレスを変更し、その後連絡は来なくなった。(これはカルトの特徴的な勧誘方法である)

② Bさんは体育館で勧誘された。「皆で楽しく体を動かす活動をしているから、一緒にやらない？」と言われ、まだ友だちも少なかったので、そのグループに入ることに決めた。一緒にバレーボールをしていたが、そのうち聖書の教えを聞くようになり、勉強が始まる。聖書に書いてあることは一語一句暗記し、信じるようにと言われ、一生懸命覚えた。やがてその団体の洗礼を受ける。その後、休学して勧誘活動を5年間行なうが、ある時、この団体のやり方に疑問や批判を持つようになり、脱会を決意。カトリックセンターに相談に来る。団体が自宅にまでおしかけてきて、脱会を思いとどまるようしつこく説得されるため、また近隣の迷惑も考えて、別の場所へ住まいを移し、脱会届を団体に郵送する。アフターケアのためにカトリックセンターにも不定期に訪れている。フラッシュバックがひどく、時々団体に戻りたいという思いが出てくる。(長年、所属しているとそこでマインド・コントロールを受けているため、脱会したからといって安心できず、独りで生活ができるようになるまで時間がかかる)

#### <終わりに>

情報が簡単に手にいれられる現代、人間同士の関係までもがまるでメールを操作するかのようになってきてしまっているのではないだろうか。すぐにつながるが、すぐに削除することもできる関係。そのような希薄な関係になっているように感じる。また宗教への意識が薄く、真の宗教への理解がなされていないため、人間を大切にしてくれるような団体に近寄られると、カルトとわからずについていってしまうことが多い。世の中の間人間関係が希薄な現代だからこそ、親身なつきあいを提供してくれるように思えるカルトに感動してしまうのかもしれない。しかしそこには落とし穴があるということに気づくことができたなら人生を台無しにしないで済む。そのために、これからもカルトに関する情報を発信し、脱会を手伝い、そして人間の本当の幸せというものを伝えていきたい。

#### <参考ホームページ>

日本脱カルト協会

[www.jsopr.org/](http://www.jsopr.org/)

カルト被害を考える会

[www.asahi-net.or.jp/~AM6K-KZHR/](http://www.asahi-net.or.jp/~AM6K-KZHR/)

全国統一協会被害者家族の会

[www12ocn.ne.jp/~kazoku/index.htm](http://www12ocn.ne.jp/~kazoku/index.htm)

## 悩み・自殺・和解

日本の自殺者は2005年で8年連続3万人を超え、人口あたりの自殺数は先進国のトップクラスだそうだ。その中で中高年男性の自殺者が目立って増加している。(40才以上の中高年が全体の7割を占めている。)職場での責任が重くなる一方で、定年も近づく。子供も巣立ち、親の死にも直面する。加えてリストラされたり、仲間をリストラしたり…また成果主義による勝ち組・負け組などストレスの強い社会。そんな状況におかれた中高年の男性が悩みを打ち明けられることができる窓口がないのが実情だ。またその傾向は年齢が高くなるほどリスクが高く、性別では男性が女性の2倍で、配偶者との別れ、健康不良また社会的孤立などが心の悩みにつながり自殺の引き金になっている場合が多い。また自殺未遂の数も十倍とも言われている。これを考えると単に3万人の問題だけではないのである。

そのひとつの事例として中高年時期に自殺した父と自分自身の自殺の疑似体験を通して、私と父の親子2代にわたる「悩み」「自殺」「和解」について振り返り、考えてみた。

### 【終戦後の自殺】

職場での悩みから自殺という今の状況を終戦直後に先取りした中年の男がいた。それは私の父で、1948年(昭和23年)年に仕事の都合で大阪の印刷工場に赴任していた。その工場の全体をまかさね、親戚やまわりの人々が喜ぶほどの大抜擢であった。

父は37才、家族は若い妻と子供が3人と外から見れば戦後の混乱期とはいえ、公私ともに順風満帆に見えた。しかし彼の心の中は冷たい風が吹きすさんでいた。指示をすればするほど冷たい年上の部下、慣れない関西弁、毎晩夜遅くまでかかっても一向に減らない仕事など。暖かい家庭に戻っても、会社のことが頭の中を堂々めぐり、出口が見つからない。この苦しさを、悩みを相談する相手がない。この抜け出ることができない輪を中断するには、いったんなにもかも中断するしか方法は見つからなかった。そして、ある日、彼は工場で首をつって自殺した。私

の母は泣くにもなげない。6才の長女、4才の長男、2才の次女の3人のほかに若い妻のお腹には新しい命が芽生えていたのだ。当時は今以上に自殺者遺族に対する偏見・差別はひどいもので、まさにいじめであった。母は私たちを連れて東京の実家に帰るしか方法はなかった。そして祖父に説得されて、不承不承お腹の新しい命を中絶することになったのであった。その後、私たち子どもを祖母に預け、懸命に働き5年後、同じ職場の男性と再婚することとなった。子どもたちの将来を慮って、また父親のいない子どもでは肩身が狭いのでとあっての再婚だったが、私たち子どもが新しい父親になつかず、別な悩みを抱えることとなった。

### 【経済成長下の精神的自殺】

1986年(昭和61年)私は41才になっていた。実父の死の年齢37才を4年も超えていた。

母は決して実父の死については触れようとせず母は子供には終始病死であるということにしていた。どうしてか分からないが、私は成長する過程で藤村操の「巖頭の感」(明治時代、旧制一高生の自殺が、若者たちをはじめ社会の人々に大きな衝撃を与えた詩)やショーペンハウエルの「自殺について」など興味を持って読んだりしていた。これが多感な青春時代のせいなのか、父親の性格を無意識に引き継いだのかいまだに不明である。しかし時代の要請につれ、経済成長まっただ中に身を置かずにはいられず、いつしか立派な?企業戦士になり、企業買収の仕事に専心していた。企業買収は一種の戦争と言えるかもしれない。食うか食われるかの末、買収する側、買収される側の関係は、戦勝国と敗戦国の関係と同じようだ。戦勝国のマッカーサーとして敗戦国に乗り込んでいって人間関係を築いていくのに神経をすり減らしていた。そのうち自分を見失っていき、どうしても生きていく力が持てないという輪から抜け出ることができなくなってしまった。視点を変えれば考えが変わると分かっている、その輪から出られない、どうにもならない自分がいたのだ。そんなある日、肉体的には会社で倒れて救急で運ばれ、入院ということになったが、精神的にはまったく自殺だったと思う。無意識のうちに実父の後追いの行動をとっていた自分がいた。そして妻と高校生と中学生の娘たちを裏切ってしまったのだという思いもあった。この

ことは私が後にキリスト者になっていくプラス方向へ向かっていく起因となるのだが。

その体験から自殺を考える場合は心の健康を病んでおり、心の病、特にうつ病の状態になっている場合が多いと思う。私のうつ状態（うつ病も同様と思う）のときを振り返ってみると①今まで楽しかったことが楽しくない。②何でも億劫になる。③疲れやすい。④イライラする。⑤集中力がでない。⑥自責の念が強い。⑦食欲がない。⑧眠れないなどの症状があった。それは危険信号で、そんなときは自分の死が唯一の解決策に思われてくる。自殺の防止には多くの自殺の背景になっている、このうつ病を早期に発見し、治療することが大切だと考えられている。

### 【父の自殺を知って】

私が実父の死が首吊り自殺であったということを知ったのは50才になってからで、母からではなく偶然に伯母から聞くことになった。なんとなく予感があったが、「首吊り自殺」にはとても動揺した。しかし45才でカトリックの洗礼を受けていたのが大きな恵みであったと感じている。動揺しながらもその悲惨な事実を受け止めることができた。しかしそれ以降も母は死ぬまで、この話に触れることはなかった。私の気持ちとしては、実父が自殺直後に差別と偏見の中で暮らしていた悲しみ苦しみを誰にも分かち合えなかった母と、涙と共に抱き合って分かち合ってみたかったという強い望みを持っていた。しかしそれは実現することはなく、しばらくして母は心臓病で亡くなった。

### 【そして支援組織や法律】

自殺者が増える中、遺族への支援に取り組む団体が増えている。これまで各団体が全国で個別に活動していたが、2005年11月、初の全国組織「自死遺族ケア全国ネット」を設立した。それぞれが培ってきたノウハウや情報を共有し、支援の質の向上を図りたいという。年間の自殺者は昨年まで8年連続で3万人を超えた。1人の自殺者に対し5人の親族がいるとすると、新たに120万人以上が遺族になった計算になる。精神科医らで運営するNPO法人「グリーンケア・サポートプラザ」（東京、会員約70人）の藤井忠幸副理事長は、自殺者遺族が一部の問題と

は言えなくなっている現状を指摘する。家族の自殺を受け入れられず、遺族が誰にも相談できないまま「うつ状態」に陥るなどの例は少なくない。中には精神的に追い込まれて後追い自殺する人もいる。

また、このような背景の中、2006年6月に国会で「自殺対策基本法」が成立した。自殺を単に個人の問題として片付けるのではなく社会的に取り組むべき課題として、基本理念にもとづき国や自治体、医療機関、事業主、学校、NPOが密接に連携して対策にあたることとなり、未遂者や遺族にも支援を行っていくことが法制化される。

しかし「ホームレス自立支援法」「障害者自立支援法」のごとく、自立へ「頑張れ」「頑張れ」方式の法律と運用を思えば、法律の枠に入らないものはさらに排除されかねないという危惧を抱いている。

### 【日本のカトリックとして】

一方日本のカトリックは2001年に「いのちへのまなざし」という司教団メッセージの中で自殺について述べており、今までのあり方を強く反省している。「教会はこれまで自殺者に対して、冷たく、裁き手として振る舞い、差別を助長してきました。今その事実を認め、私たちは深く反省します。この反省の上に立って、これからは神のあわれみとそのゆるしを必要としている故人と、慰めと励ましを必要としているその遺族のために、心を込めて葬儀ミサや祈りを行うよう、教会共同体全体に呼びかけていきたいと思えます。」

### 【和解へ支え手と居場所づくり】

自殺する人は多くの場合、自殺する時点では「うつ病」か「うつ状態」だと言われている。自分自身との断裂、周囲との断絶が心を引き裂いている状態である。それには、ありのままの自分自身を受け入れ、自分自身との和解、周りの状況との和解がキーポイントになると思う。

また自殺とはその当事者は殺人の加害者であり、同時に被害者であるとも言える。従ってその遺族は加害者遺族と被害者遺族の側面を同時に持っていると思う。私たちが彼らのその悲しみに寄り添うことは決して容易ででない。しかし手をこまねいてばかりはいられないと思う。

「自殺」の原因である「心の悩み」ということは、法律とはあまりに

縁遠い存在であると思われるから、法律の枠を超えて、自分自身との和解、周囲の人々との和解、環境との和解へのサポート、また和解できない悩みにそっと寄り添う支え手や居場所づくりが大切になってくると思う。キリスト者として、そのような支え手や居場所づくりの手伝いができればと考えている。

## 第2部 福音の視点から

### 心の悩みとその解放の道すじ

#### はじめに

現代人の抱える心の悩みを、キリスト者としてどのように受けとめ、どのようにかかわっていけばよいのだろうか。この項では、キリスト者として、福音的な視点から考察してみたい。福音的とは、イエス・キリストの言動に基づいた視点である。そのため、福音書の中でも、心の悩みをかかえていると思われる病人をいやす場面をとりあげてみる。いわゆるゲラサの悪魔つきの物語である（マルコ5. 1-20）。この話はマルコ福音書の奇跡物語の中で最も長い話で、ドラマティックに描かれている。汚れた霊に取りつかれた人は現代的な意味では、精神的な疾患を負っているように見える。イエスはこの人をいとも簡単にいやされる。その際、多くの汚れた霊を豚の群れに乗り移らせて、その豚が湖の中でおぼれ死ぬという、かなり劇的な展開になっている。心の悩みはさまざまなものがあり、ひとつの物語で語るのは難しいが、ひとつの象徴として解釈してみたい。この物語を心の悩みをかかえている人のいやしのプロセスとして読み解いていく。

この人の悩みを包み込んでいる闇を3つの観点から分析し、この人を解放していくいやしの側面を3つの観点から分析したい。

#### 1. 心の悩みを生み、包み込む闇

##### 1-1. 隔離と孤独

汚れた霊につかれた人は、墓場を住まいとしていた（5. 3）。ユダヤ人にとって、墓場は汚れている場所である。そこに住んでいるということは、いかにも汚らしいというか、異様である。現代にとっても、そこに住むというのは普通ありえない。いかにも彼の病の深刻さを示している。人びとは彼を縛っておこうとした。彼は反社会的な暴力行為をしていたのだろうか。ところが、「もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。これまでも度々足枷や鎖で縛られ

たが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかった」(5. 3-4)。かなり凶暴なふるまいだったのだろう。

彼の狂気の姿よりも、なぜ人びとが彼を縛っておこうとしたのか、むしろそれが気になる。反社会的だったので、つまり社会に都合が悪い言動をしたので、彼を監禁しておこうとしたのだろうか。そのような社会からの隔離自体が、この人の苦しみだったのではなからうか。つまり、心の悩みを抱えている人の第1の闇は、この隔離や孤立ではなからうか。私たちは悩みをかかえている人にまず闇があると考えるが、そうではない。むしろ、めんどうな人をどこかに隔離しておこうとする人びとの態度が、闇を生んでいるのだ。たとえ悩みをかかえていても一人の人間であって、動物ではない。鎖で足枷で縛ることによって、その人の人間性そのものを奪っているのだ。

実際のところ、心の悩みをかかえている現代の人びとにとっても、最大の問題は孤独・孤立だと言えるだろう。精神障がい者や認知症の人をどこかに閉じ込めようとする動きはどこにでも見られる現象だ。引きこもりの場合、職場や学校に出かけられないほど、心理的に隔離されていると言えるかもしれない。現代人の心の最大の悲劇とも言えるだろう。

注目すべきは彼の言動である。「彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた」(5. 5)。何を叫び、なぜ自分を打ちたたいていたのか。彼の心にどれだけの苦しみが詰まっていたのか、それがよく分かる表現である。自分を打ちたたくというのも、痛々しい。心の悩みをかかえている人が、自分を自虐的に責めるのはよくあることだ。少女がリストカットするのも、そのような行為のひとつではないだろうか。その叫び声をだれが聞いていたのか。その叫びの奥にある悩みや苦しみにだれが目を向けていたのだろうか。その叫び声を聞いた唯一の人物がイエスだったのだ。

## 1-2. レギオン(軍団) - 悪の集団的な力

イエスがその叫び声を聞き、この人に対峙すると、汚れた霊はあっさり降伏する。そして、自らの名をレギオンと名乗る。レギオンとは、ローマ帝国の一軍団を意味する言葉である。一軍団とは実に6000人である。福音書に出てくる百人隊長とは、その軍団の最小単位の隊長にあ

たる。当時はローマ帝国が辺り一帯を支配し、実際のレギオンの司令部はダマスカスにあった。東方(ペルシャなど)ににらみをきかすためである。その周辺の小さな都市には、その最小単位である、百人隊長をリーダーにした100名の守備隊がそれぞれ駐屯していた。しかも当時のローマ帝国は、諸民族を分断支配する戦略をとっていた。ガリラヤ湖西岸はカファルナウムやティベリアスなどユダヤ人の住む地域だった。ガリラヤ湖東岸はギリシャ人が住む異邦人の地域だった。「向こう岸」(5. 1)という言葉には異邦の地だという宗教的に軽蔑した気持ちと、自分たちより進んだギリシャ文化が花開いていることに対するコンプレックスが入り交じった響きがある。民族同士の対抗意識を利用して、ローマのレギオンは地方を統治したのだ。

レギオンとはとてつもなく大きな数であり、さまざまな支配が入り組んでいることを意味している。彼に取りついていた汚れた霊は信じられないほどの数で、しかも支配体制を巧妙に整えた組織的悪の集団だったのだ。その後、豚に乗り移り、湖に飛び込んで死んでしまうが、その豚の数が2000匹だった(13節)。魍魎魍魎とした悪の集合体とその膨大な数とは何を意味しているのだろうか。

まず、取りついている悪霊が単数ではなく、複数だということに注目したい。心の悩みに当てはめてみると、その原因は複数であること、しかも膨大な原因が絡み合っていることを認識せねばならないということである。つまり、原因を一つに還元することができないということだ。心の悩みを見ていくとき、この還元主義に気をつけねばならない。還元主義とは問題を単純化してしまう誘惑である。例えば、引きこもりは本人の意志が弱いからだ、本人のわがままだという風に、本人だけの責任に還元してしまう誘惑である。悪いのは本人だけで、責任をすべてその当事者に押しつけてしまうだけだと、そこから何の救いも、解決も生まれてこない。またよくある悪しき単純化の例は、すべての心の悩みを親子関係の問題に還元する形である。例えば、引きこもりは、親が子供を甘やかして育てたからだ、摂食障がいは、幼児期に母親の愛が足りなかったからだなど。結局、子どもの問題はすべて両親(あるいは母親)のせいだとする見方である。当たり前なことだが、その母親を責めるだけでは、また何の解決にもならない。実際はそのように考えている人が多

いので、当事者とその家族がその偏見で苦しむことになる。

大切なのは、その悩みの原因を複眼的な視点から解明していく姿勢である。例えば、これだけたくさんの若者が引きこもっているのは（推定100万人から200万人）、もう圧倒的な社会現象であり、その若者や母親だけに責任を帰すのは不可能なのは明白である。社会や文化の変化、政治・経済のあり方など、多面的な原因が絡み合っているのは間違いないのだ。つまりレギオンの複雑で巧妙な支配の中で、ひとつの結果として、ひとつの悩みが生じているのだ。それほど重層的な悪の集積の結果として、この悩みがある。この現実の深さと重みを忘れてはならないだろう。そのレギオンと向かいあっていくには、かなりの覚悟が必要である。

このようなレギオン解釈は、実際に苦しんでいる人から学んだことだった。ある聖書の勉強会で、この箇所を取りあげたことがある。とおりにいっぺんの説明をした後、このガラスの悪魔つきをどこで体験したことがあるかを質問してみた。正直にいうと、そのときまで、この悪魔つきをかなり表面的なイメージでしか捉えていなかった。このような姿から、とても汚い格好をしたホームレスを連想したり、墓場とは現代では精神病院の閉鎖病棟というイメージしか湧いてこなかった。その質問に対して、心の悩みをかかえていたひとりの女性（うつ病で仕事を休業中だった）が、次のように分かち合ってくれた。この悪魔つきとレギオンは、自分の会社だと思う。その会社はある特殊な資格をもっている人たちが上司で、お金も名誉もある人たちだ。彼らはその立場を利用して、何人もの女性を困っていたり、不正なことをいっばいしている。自分はその会社でセクハラを受けたり、超過勤務で働かされたりして、結局、うつになってしまった。自分にとって、あの会社がレギオンだ。文字通り大勢の悪霊がいっばいいて、人を食べ物にして生きている。自分はその犠牲になったのだと。その話を聞いてから、現代社会の心をむしばんでいるレギオンの正体を見たような衝撃を受けた。まさにレギオンという、ある圧倒的な集団的暴力が、現代人の一人ひとりの心を苦しめているのだと悟ったのである。

会社の勧めで、彼女はカウンセリングを受けて、そのうち自分の親子関係に問題があることに気づいた。そして、実際の両親と和解するセッ

ションを受け、それによって彼女は親子関係の傷から解放された。それでうつの症状がある程度緩和されたものの、結局、会社に戻ることはできなかった。うつの真の原因は親子関係ではなく、彼女の会社の中にある構造的な悪の集積だったのだ。レギオンを追い出さない限り、真のいやしは訪れない。

### 1-3. イエスの退去ーレギオンの社会

3つめの悪の現実だが、それはイエスのいやしのわざの後に起こる。豚がおぼれ死んだ話を聞きつけて、人びとがやってくる。「彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって坐っているのを見て、恐ろしくなった」（5. 15）とある。いやしが行われたとしたら、感謝したらよいと思うが、それよりも恐れ感情が強く働いたのだ。事の成り行きを聞いたあと、「人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした」（5. 17）。何と善行をしたイエスを追い出すのだ。カファルナウムなどでは、イエスにずっととどましてほしいと言っていた民衆が、この地方では逆に出て行ってくれと主張している。全く不思議なことだ。なぜ苦しみを解放した人が追い出されねばならないのだろうか。なぜ自分たちも解放されたいと願わなかったのだろうか。

たしかに彼らは、イエスの不思議なわざを恐れたのだろう。多数の豚がおぼれ死に、あの狂気に取りつかれた人がまともになっているのを見て、驚いたは十分理解できる。しかしながら、なぜイエスに出て行ってもらわないとだめだと思ったのだろうか。

それは彼らももっと別のものを恐れていたのではないか。結局、彼らが真に恐れていたのは、レギオンそのものではなからうか。ローマ帝国による民族の分断支配、百人隊長をすみずみの都市に配置する軍事支配、さらに経済・文化まで巧妙に支配していた。そのレギオンの力はあまりに強大で、心が病んでいる人だけでなく、普通の市民たちも皆、その力の支配下におかれている。イエスはまさにレギオンの支配をひっくり返す力を秘めていたので、人びとは恐れたのだ。大半の人びとは、レギオンが悪いものであると分かりながら、その支配下で安定して暮らしている。その街の人が皆、レギオンの支配下におかれている恐ろしさ。しか

もそれを自覚していない様子がよく分かる。そのレギオンの正体がイエスによって暴かれ、断罪されたので、人びとは恐れおののいたのだ。自らを解放してくださる方を信じるのではなく、解放してくださる方を排除することによって、現状維持の生き方を選択したのだった。

現代の私たちも同じかもしれない。キリスト者である私たちも、実際は福音的ではない世俗的価値観、社会常識、社会構造に縛られているのではなかろうか。新自由主義に基づいた雇用制度の大幅な見直し、規制緩和の行政改革の動き、教育制度の疲弊とさらなる改悪、それらが重層的な悪の集積として、現代のレギオンを形成している。それに対して、私たちは、本音ではそれを変えていくことに大きな恐れをいただいている。解放している力が、自分たちの生き方を脅かす力として感じてしまうのだ。現状を肯定して、何も変えなくてよいと思ってしまう無意識の闇の深さこそが、レギオンの本当の恐ろしさかもしれない。そしていつも、いつも、異質なものを排除していく力として現れるのだ。

安定を壊していく異質性に対して、レッテルを貼り、排除の対象としていくのは昔も今も変わらないかもしれない。例えば、イエスのレッテルは、「大食漢で、大酒飲み。徴税人や罪人の仲間」(マタイ11、19)である。ある知り合いは心の悩みを背負った人だった(先日、40代で亡くなった)。彼は悩みを背負って生き抜いたひとり的人格である。その時々で次のようなレッテルを順番に貼られていた。「ニート」「引きこもり」「ホームレス」「精神障がい者」。レギオンから追い出される人は、その時々でいろいろなレッテルが貼られ、忌み嫌われ、排除されている。先ほど述べた女性であるが、カウンセリングでもうつが治らないので、結局、その会社を退職して、やっとうつ病から解放された。彼女は特別な学歴も資格もない40代の独身女性である。健康になって再就職を目指したが、正規社員で雇用してくれるところはなく、今はバイトで生活している。彼女の最初のレッテルは「うつ」で、今は、「負け犬」、「フリーター」、「ワーキング・プア」である。将来はどうなるだろうか。「ホームレス」か「生活保護受給者」というレッテルが貼られる可能性がないとも言えないだろう。それに対して、社会の基本的な姿勢は一貫している。ホームレスでも、心の悩みをかかえている人に対してでも、「人々はその地方から出て行ってもらいたい」と言いたすのである(マルコ

5、17)。

## 2. 人びとを解放するイエスの働きに連動していく

### 2-1. 向かい合う一人を人として

そのようなレギオンの力を恐れ、しかもそこに安住してしまった私たちが、心の悩みをもつ人の解放にどのように手助けできるのだろうか。そのため、イエスの態度を注意深く見つめ、そこから学び、ならって行く以外にないだろう。

まず第1に注目すべき点は、イエスはこの病んだ人と正面から対面している態度である。実際は、悪霊に取りつかれた人の方から、「イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ」(5、6-7)。走り寄ってきたのは、救いを求める止むにやまれぬ心の叫びのあらわれだったからかもしれない。本当は救いを望んでいたのだ。そしてイエスは、この人と真正面から向かい合う。話相手が本人なのか、本人の苦しみの部分(汚れた霊)なのかよく分からない描写であるが、とにかく対話をしている。これは見逃せない点である。イエスはその人の人格とかかわり、しかもその悩みと正面から対峙している。

私たちもまずこの姿勢から見習っていきいたい。なぜなら、心の悩みをかかえている人とかかわることは、膨大な手間と労力を有することになるので、普通は避けて通ってしまうからだ。結局は、1-1で述べたように、足枷や鎖でどこか見えないところに縛りつけておく方が、ずっと楽な解決方法なのだ。そうすれば、私たちは負の現実と直面しないで済ませることができるから。

もちろん私たちの大多数は心の問題にかかわる専門家ではない。ある場合は、相手の問題を安易に取り扱ってしまい、かえって問題を複雑にしてしまうこともありうる。また、相手の苦しみに同情しすぎて、その苦しみに自分の心が飲み込まれてしまう危険もある。イエスの姿を見ていると、イエスは悪霊と戦ったのではなく、最初から悪霊はイエスにひれ伏している。イエスが主導権を完全に握っている。相手に全く振りまわされていない。そのイエスの姿により頼みながら、その人の人格に向き合っていきたい。

一対一のかかわりを大切にする姿勢は、イエズス会の教育の伝統では、



「Cura Personalis（一人ひとりの世話）」と呼んでいる。優秀な人を個人的に世話するだけでなく、むしろ悩みをかかえて苦しんでいる人に対してこそ、私たちは Cura Personalis の伝統を生かしていきたい。その人と真正面からかかわり続けることによって、何かを学び、何かが生まれ、何かが変わってくるものだから。

## 2-2. 豚の大群－悪の姿がさらされる

悪霊との話し合いで、彼らが豚に乗り移ることになる。イエスの許しをもらった後、「汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、2千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ」（5、13）。

日本人の動物愛護の精神から見れば、なぜ豚がおぼれ死んだのか何か納得できないものがある。しかしながら、ユダヤ人から見れば、豚は汚れた動物の典型であり、汚れた霊が汚れた豚の中に入って、滅びていくのは十分納得のいく描写になっている。

これはどういうメッセージとして受けとめればよいのだろうか。2-1のレギオンの力に対抗して、次のように言えるかもしれない。汚れた霊のレギオンは不可視で隠れている存在であるが、それが豚の姿になることによって、だれにもはっきりと分かる可視的な姿になる。悪の実態は、それがあつて共通に意識化されることによって、初めて滅ぼしていくことができる。悪とその原因が明確に把握されてこそ、その呪縛から解放されるのだ。

レギオンは実際は隠れた形で働いている。汚れた霊に取りつかれた人の中に、無数の軍団が潜んでいたとは、だれも分からなかった。つまり、闇の勢力は隠れた形で、最大の悪の力が発揮できるのだ。イエスが名前を尋ねたところ、この悪霊が「名はレギオン」（5、9）と告白する。古代の世界観では、名前を知られるということは、相手の支配下に入ってしまうことを意味している。「レギオン」という名をイエスが知ったところから、イエスが勝利している。ただその名前に隠れている醜悪な全体的な姿は現れていないので、まだ明確にその実態を把握していたわけではない。それが豚に乗り移ることによって、可視的になることによって、悪の量、姿、形などがはっきりと白日の下にさらされ、それによ

って、イエスの勝利が決定的になる展開である。

私たちにとっての教訓は、悪や病の原因を私たちがいかに意識化できるかがポイントなのである。霊とは目に見えないので、何かよく分からない存在である。しかしながら、豚ははっきりと目に見える形で認識できる。私たちにはレギオンを意識化するために、豚が必要なのだ。豚の形で明らかにしていけない限り、いつまでも解決の道筋が見えてこないのである。

私たちはイエスのように、一挙にその豚を全滅させていくことはできない。それでも私たちが悪の実態とその原因を解明していく努力を続けていくとき、その悪を全体的に破滅に追いやるイエスの肯定的な力にあずかっていくことができるのではないだろうか。そのために、専門家の協力は不可欠である。彼らの専門分野の研究成果は意識化の大切な道具立てになる。それもひとつの限られた領域にのみ目をこらすのではなく、レギオンを俯瞰していく、グローバルで複眼的な視点が必要である。また多くのことが隠されているので、実態を知らしめる訴えかけ（さまざまなメディアを通して）も必要である。市民社会に問題を発信していくことで、より大きな世論を築いていけるだろう。さまざまな協力とネットワークのつながりによって、イエスの解放の力が集散的に形成されていく。そのつながりを象徴的に語るのが、家に帰り、語ることである。

## 2-3. 家に帰る－もう一つの世界へ

汚れた霊を追い出してもらい正気になった人は、イエスと一緒にいきたいと願う（5、18）。正気になったとき、今までの自分とまわりの環境がつくづくいやになったのかもかもしれない。イエスと共に未知の世界に踏み込んでいくことで、今までの世界と完全に縁を切りたかったのかもかもしれない。ところが、イエスはそれを認めないで、「自分の家に帰りなさい」と言う（5、19）。それは、身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせるためだという。彼は今まで家族から孤立し、墓場という死の世界に身をおいていた。彼がまずすべきことは、自分の元の居場所に戻り、自分の本来のコミュニティに戻ることにいる。家には、彼の肉親がいる。その肉親の絆をまず取り戻すことがなにより大切なことだ。

これは現代でもきわめて重要なことである。1-1で述べたように、心の悩みをかかえている人は、多くの場合、伝統的な個人を守る共同体（家族や地域共同体）から外れて、孤立しているからだ。だからこそ、共同体への復帰そのものがいやしのプロセスの大事な要素になっている。社会がレギオンに支配され、イエスを追い出してしまう闇の力が働いている。それに対抗するものは何か、結局、家に帰り、主の憐れみを語っていくことではなかろうか。還元主義に陥らなければ、多くの場合、親子の関係を修復することは、いやしの重要な要素になることが多い。それは家に帰ることの始まりでもある。親子のつながりを取り戻し、家族との関係を取り戻していくことは、共同体を再構築していく動きにひろがっていく。

家とは新しい人間共同体をも意味している。肉親の家族にとどまらず、同じ悩みをかかえた仲間との出会いと、つながりに発展していく可能性もある。レギオンに痛めつけられ、レギオンから追い出された者たちが、力を合わせて共同体を築いていけば、それが彼らの新しい家なのだ。そのような家があるならば、社会の流れに囚われず、自分たちが助け合いながら自立していける可能性が開かれてくる。いやしの最後に共同体に復帰するというよりも、いやしの最初のプロセスから共同体を作っていくことだ。現代の新しい動きはそのような共同体づくりである。悩みをもつ者、あるいはその家族が自助グループなどを作り、そこから互いに助け合いながら、解放の道を探していくのである。私たちは独りではあまりに無力である。しかも傷をかかえながらひっそりと生きている人びとはさらに打ちひしがれている。だからこそ仲間が必要なのだ。まず仲間を集め、自分たちの悩みを分かち合い、そこから居場所や自助グループを作っていく。このような共同体づくりこそが、レギオンを打ち破っていくイエスの力を真の意味で発揮できるのではなかろうか。

イエスは次のように私たちに約束してくださった。「わたしの父の家には住むところがたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える」（ヨハネ14、2-3）。この場所は、死後の天国での居場所だけを指しているのではない。私たちが今苦しんでいる孤立や孤独を乗り越え、この現

実社会で生きられる家・場所をイエスが提供してくださるのだ。だからこそ、私たちも、イエスとともにその場所を用意していく働きに呼ばれているかもしれない。

そのような共同体の支えから、彼は「イエスは自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた」（5、20）。レギオンに支配されている社会に対して、イエスの恵みを語ることによって、その社会全体を変革していく働き手になっているのだ。私たちは、新たな恵みの言葉を語る必要がある。当事者が苦しみの体験から得た新しい言葉である。復活した主は言われた、「彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る」（マルコ16、17）と。悩みをかかえていた人がイエスの助けにより、今度は人びとを助ける担い手になっていく。新しい言葉によって、この世界に新たな希望の光をとらすのだ。

このような変革の動きは今、世界で起こりつつある。2007年1月には、第7回世界社会フォーラム（World Social Forum）がケニアで開催された。「もうひとつの世界（Another World）は可能だ」というモットーのもと、世界のレギオンの動きに対抗して、さまざまな市民運動体が共同体とネットワークを通して、違う価値の世界を作っていくとしている。当事者が主体になった共同体とネットワークづくりを通して、この社会を変えていく動きが現に始まっている。新しい言葉はすでに語られているのだ。もちろん一人ひとりの問題は違うし、かかわる場も違う。その中で新たなつながりが生まれていけば、やがてレギオンに対抗する新たなうねりが生まれてくるであろう。

## まとめ

以上のことをまとめると、次のように言えるだろう。心の悩みをかかえている人はおうおうにしてひどい孤独の状況におかれている。だからこそ、支援者は同じ人間として、一対一で真正面からかかわらなくてならない。そこで逃げたり、相手をどこかに閉じこめようとしてはいけない。ただしあまり一対一の閉じた関係に入り込まないように注意も必要である。なぜなら、その人の背後にはレギオンがいるからだ。悪や罪の原因が多重的に重なり合っているため、それに個人で対決していくには大きな労力と危険が伴う。圧倒的な悪を前にして、個人が無力である

ことを肝に銘じておかねばならない。だからこそ、共同体的なかかわりが不可欠である。対抗していくためには、当事者も支援者も気楽に悩みを分かち合える場や共同体が必要である。多面的なかかわりの中で、レギオンを豚という明確な形で意識化していける。原因や背景をより深く、より広く認識することによって、さらに多面的な解決方法や救いの道を見だしていけるだろう。共同体、専門家、理解ある隣人たちとネットワークを形成しながら、今の社会とは違う価値観を生きる新たな社会を少しずつ築いていけるのではないか。それこそが、イエスが望んでいた「神の国」である。

そのような当事者による共同体・自助グループの実践的な可能性を次項で紹介したい。

## 第3部 実践的な勧め

### 更生について考える

私はイエズス会社会司牧センターに勤めて23年になる。社会司牧センターはもともと、いわゆる社会問題や構造的不正に取り組んできた。心の問題は守備範囲になかった。そんな中で、私が心の問題に関心を持つようになったのは12、3年前。センター主催のセミナーで、日本の教育問題について学んだ時だった。参加者といっしょにKJ法という分析手法で教育問題を考えるうちに、家族の変化や地域共同体の崩壊、そして何より子どもたちの抱える心の闇に気づかされた。ちょうど自分自身も子育てが始まったばかりだったので、社会分析だけでは理解できない心の問題を意識するきっかけとなった。

意識がさらに深まったのは、6年前、死刑廃止運動に関わってからだ。死刑問題は従来の社会司牧センターの仕事とはやや異質で、選んだというより、巻き込まれた形だった。最初は必要に迫られて学んでいたが、そのうち引き込まれて、進んで学ぶようになった。死刑をとりまく構造的不正も興味深かったが、それ以上に関心を持ったのは、罪とゆるし、生き直しということだった。個々の死刑囚や被害者遺族のケースを知れば知るほど、人間の弱さや哀しさ、美しさに心うたれた。そして何より、彼らの「生き直したい」という切実な願いが身にしみた。

当時、私は夫婦仲が険悪で、自分の見つめ直しを迫られていた。自分では、いわゆる正義感や社会的不正に対する感受性は強いと思っていた。しかし、建前の正義は自分の心の弱さをかくす盾（たて）だった。夫婦仲の悪化は、明らかに私の心の弱さのせいだった。私自身が生き直しを迫られていた。「正しいから救われる」のではなく、「弱いから、罪深いからこそ救われる」という福音のメッセージに心惹かれた。

死刑廃止への道筋で欠かせないのは、犯罪者の更生だ。死刑とは、「更生の余地がない」と言われる犯罪者を社会から追放する究極の手段だ。

どんな罪を犯した人にも更生の余地があるのでなければ、世論は死刑廃止に踏み切らないだろう。更生について学ぶうちに、米国で行われているアミティというプログラムを知った。

アミティは、AA（アルコール依存症の自助グループ）やNA（薬物依存症の自助グループ）などで用いられている治療共同体の方法論を採り入れた、犯罪者・薬物依存者の更生プログラムだ。米国の3つの州で10の施設を持ち、刑務所出所者や薬物依存者の社会復帰を支援している。また、3つの刑務所で矯正プログラムも行っている。このプログラムに参加した受刑者の再犯率は通常の三分の一と言われている。

アミティのプログラムで感動的だったのは、終身刑の受刑者が他の受刑者とのグループワークでヘルパーをつとめ、立ち直りの希望や勇気を与えていたことだ。AAやNAでも、同じように依存症からの回復者がヘルパーをつとめている。「弱いから、罪深いからこそ救われる」だけでなく、「弱いから、罪深いからこそ他人を救うことができる」のだ。

長年の社会司牧センターでの仕事で、構造的不正や社会分析の知識は増えたが、実践の方法論には迷いがあった。だが、この自助グループという方法論との出会いに目を開かれた。「同じ悩みを抱えた者同士が助け合って、自分たちの力で立ち上がる」。それはまさに、フィリピンやベトナムで出会った「コミュニティ・オーガナイズ」（共同体づくり）、解放神学で学んだ「基礎共同体」だった。知識としては知っていた方法論が、現実として自分に迫ってくるのを感じた。

もう一つ、死刑を考える上で避けて通れないのが、被害者支援の問題だ。「なぜ、加害者にばかり肩入れするのか」という、死刑廃止運動に対するおきまりの非難を待つまでもない。死刑囚と向き合うということは、その罪の犠牲者と向き合うことに他ならないからだ。では、被害者の支援とは何なのか？ 事件の真相を明らかにし、犯人にふさわしい罰（＝死刑）を与えれば、それで十分なのか？ ある被害者遺族はこう語る。「私たち遺族は、親しい家族を失って、谷底に落とされています。加害者を死刑にするというのは、その人を同じ谷底に引きずり落とすことです。でも、加害者が死刑になっても、私たちは相変わらず谷底にいます。私たちが本当に望んでいるのは、谷底からはいあがることです。

以前と同じように、笑って生活できるようになることです」

その点でヒントになるのが、修復的司法だ。検察官と弁護士が被害者と加害者の代理として法廷で争い、罪にふさわしい罰を決めるのが、現在の応報的司法だ。その第一の目的は、被害者の癒しや加害者の更生よりも、社会秩序の維持だ。他方、被害者と加害者を含むコミュニティ全体が、被害者の癒しと加害者の更生をめざすのが、修復的司法だ。その根底には、「聖書が説く正義とは、罪を裁き罰を与えることよりも、紛争を解決し関係を修復することを目指している」という、修復的な正義観がある。私はこの修復的な正義観に、従来、社会司牧センターで行ってきた構造分析や社会正義の方法論と、新たな心の問題への取り組みとが、統合される可能性を見出している。

修復的司法は単なる理論ではない。中世には法廷外で紛争を解決するコミュニティ司法が存在した。また、カナダやニュージーランドでは、先住民族の伝統を受け継いで、地域で開かれるコミュニティ・カンファレンスや、親族で開かれるファミリー・グループ・カンファレンスがあり、犯罪者や非行少年の更生に成果をあげている。ここでもまた、「コミュニティ／共同体」が現れてくるのだ。

心の問題の一つの鍵はコミュニティだと思う。コミュニティとは、要するに人と人との関わりだ。最近、読んだひきこもりやニート（就学も就労も、職業訓練もしていない若者）の自立支援に関するルポで、30年にわたって自立支援に携わってきた人の言葉が印象的だった。「学者や役人はいいよ。事例や統計からきれいな理論を作れる。だけど我々現場の実践者は、生きて変化する人間を毎日相手にしている。理論通りに行かないことなんかしょっちゅうなんだ。それでも言えることは何か。我々の言葉が大雑把だったり矛盾したりするのは、ある意味で仕方ないんだよ」

テレビのドキュメントで紹介された、やはり若者の自立支援に携わる人は、こんな風に言っていた。「結局、ウチの施設に来る人たちは、人との関係で傷ついて、ひきこもるようになったんですね。だったら、そこから救うのも、人しかないんじゃないかな。ほんと、人って出会いで変わるんですね。ぼくも縁あってこの人たちと出会ったんだから、

絶対見捨てないですよ。彼らが変わるきっかけになりたいし、なる自信はありますよ」

絶対にあきらめない。誰も切り捨てない。それは「矯正」というより「共生」だ。「つながろう」という意志だ。それは死刑という究極の隔離や追放とは対極にある。私たちに問われているのは、実は、「心の悩みという問題」にどんな対策をとるかではなく、「心の悩みを持つ人」とどのように向き合うかということだろう。公共広告機構の意見広告にあったように、「『いのちが大事』と百ぺん言われるより、『あなたが大事』と一度でも抱きしめられれば、救われる」のだ。

当事者同士の自助グループ。家族。コミュニティ。支援者。NPO。専門家。行政。問題によって、ケースによって、誰の助けがまず必要か、何をどう組み合わせればいいのか、方法はさまざまだろう。だが、どんな場合でも一番大切なのは、「つながろう」という強い意志と、「人は絶対に変わる、生き直せる」という希望だ。これからも「死刑」との関わりを通じて、「生き直す」ことを考え続けていきたい。

#### <参考文献>

- \*坂上香ノアミティを学ぶ会編『アミティ・「脱暴力」への挑戦ー傷ついた自己とエモーショナル・リテラシー』日本評論社、2002年
- \*原田正治『弟を殺した彼と、僕』ポプラ社、2004年
- \*ハワード・ゼア『修復的司法とは何かー応報から関係修復へ』新泉社、2003年
- \*足立倫行『親と離れて「ひと」となる』NHK出版、2006年

## スープの会 風まち喫茶に関わってきて

私は、「スープの会」というホームレス支援の市民活動グループにここ数年間、スタッフとして関わってきました。「スープの会」の主な活動の場として、毎週の新宿駅周辺の「路上訪問」や、2000年に開設した「地域生活支援ホーム」、さらに2003年より地域での居場所作りを旨として早稲田に開店した「風まち喫茶」があります。「路上訪問」では、電話相談のピラを配り、さまざまな相談を受けたり、食料を配ったりしています。「地域生活支援ホーム」は、現在5つのグループホームがあり、またいくつかのアパートを借り上げています。私たちは、何よりも「路上～地域生活支援ホーム～地域へ」という流れを大切にしてきました。

その活動を通じて私自身が悩んだのは、ホームレスの方に、生活保護を整え住居を提供しても、そこに入居してくる人たちの「生きがい」には、なり得ないことが多いという事実でした。私は、次第に一人一人のニーズに応じて、その人なりの居場所や生きがいを模索していくことが、課題だと感じるようになりました。そのためには、元ホームレスという狭い人間関係の枠組みを超えて、地域社会やさまざまな団体と連携し、ネットワークを広げる中で、見出していくことができるのではないかと考えました。

私が担当していたものに、その課題の一つとして、地域の中での居場所作りを旨として作られた「風まち喫茶」がありました。この喫茶店は、早稲田の街中にあり、元ホームレスの方だけの場として限定するのではなく、大学生のサークル活動の場や、映像関係者の勉強の場（スクリーンがあります）、鍼灸学校の学生さんのボランティアの場として、また毎週金曜夜には、ミャンマー料理や韓国料理を作る「風まちバー」としても開放して行きました。

通常の午後の喫茶店の日は、入居者の元ホームレスのおっちゃん達や、身体に障がいを持っておられる方が毎週お料理を作ってくれたり、「ひきこもりの会」の若い方などが、一緒になってコーヒーを入れてくれたりしました。これらの方々は、心身共に就労困難な方が多数でしたが、

ここでの活動を通じて、「自分は誰かの役に立っている」という思いを感じるようになって嬉しいと、話す人もいました。ここに来られていた人の中で、特に2人の方のことを思い出します。

Aさんは、中学時代にいじめにあい、何年間も家にひきこもっておられた方でした。喫茶店に来た頃は30代になっており、「ひきこもりの会」を通して「スープの会」と繋がり、週1回のコーヒーのマスターを引き受けてくれていました。最近、Aさんと会ったとき、彼はこのように言いました。「はじめの頃は、人と話すことが怖く、大変緊張していたけれど、今は随分改善されました。うまくいえないけれど、人前が出る自信がついたのです。毎週、休まずに通い続ける中、人との繋がりを通して、少しずつ自立しつつある自分を感じるし、それが一番この場で与えられたものと感じています。いつか、ひきこもりの会のメンバーで、事業を始めようとも考えはじめています。」Aさんは、他にも通信教育で勉強を始められ、バイトもされるようになったようです。

「風まち喫茶」は、必ずしも毎回居心地がいい場とも限らず、当然人間同士の集まりですから、時には口論や喧嘩もあります。けれども、そんな中でもAさん自身は心の内の葛藤を顔には出さず、にこにこことされ、たんとんとコーヒーを入れておもてなしをされており、そんな姿を見るにつけ私は、Aさんの心の成長を感じずにはおれませんでした。

Aさんと一緒にの時期に、居場所作りのお手伝いをさせていただいていたBさんのことは、悲しみの中で今でも決して忘れることができません。Bさんはまだ20代の女性でしたが、生育歴の中で受けた心の傷から、度々情緒不安定となり、摂食障がいや自殺未遂を繰り返されていて、服薬しながらなんとか生きていて、という感じの方でした。せっかく大検を取得して入学した大学も中退してしまい、居場所を求め、さまよっておられるという感がありました。

そんな中でBさんは、波はあっても時々、喫茶店に顔を出しては、Y大学のサークル仲間ともよく交流されていたし、「風まち喫茶」にいた時にも、人との出会いを楽しんでおられることも多かったように見えました。映画のビデオを借りてきて、みんなで見ようと言ってくれたり、おっちゃん達と一緒に食事したりと、そんなささやかな交流を通して、周囲の人々もまた、口には出さずともBさんを見守っておられた雰囲気

があったと思います。Bさんの顔を見ないと、「どうしてるかなあ」と誰からともなく、心配の声が上がりました。またBさんの調子が悪そうな時などは、保健師さんや「スープの会」のメンバーやY大学の友人などが、家庭訪問などもしていました。喫茶店には常連の、そして気持ちの優しいBさんでしたから、ある意味で皆に大切にされていたと思います。そんな数年が過ぎた時期、Bさんは、個人的事情により早稲田界隈から、少し遠い場所に引越しをしてしまい、何ヶ月かの間、喫茶店に顔を出さなくなりました。

その後、Bさんが自殺されたという連絡を受けたのです。聞いた話では、自殺された前後は、Bさんと繋がりがあったさまざまな場所や人との関係が、疎遠になっていた時期だったそうです。ある意味で彼女を支えていたいくつかの場所や人が、その時期たまたま遠くなってしまい、Bさんがどんな状況であったか知ることはできませんが、少なくとも彼女は、それまで心の拠りどころであった場所から、助けを見出せなくなってしまったのではないかと思います。Bさんは、今のままの自分では社会に受け入れてもらえる場所がなく、このままでは、自立できないと悩んでおられましたが、それ以上に愛されたいという愛情飢餓や、心の傷やトラウマに苦しんでおられたのです。

そんなBさんの姿を思い出しながら、立ち直っていったAさんとの違いは何であったのだろうかとは私は、思うようになりました。Aさんには、もちろん本人の強さもありますが、見守ってくれる家庭があったことを何よりも感じずにはられません。それに対し、Bさんにとっては、家庭の問題こそが苦しみの根でもあったようでした。

施設の入居者のおっちゃん達を見ても、そのほとんどが孤独で家族も無く、家庭的な居場所を求めている方が多かったと思います。マザー・テレサが、「愛は家庭から」と言っていたのを思い出しますが、このことから居場所作りの中には、一人ひとりがほっとできる家庭的な空間にもっと近づくことも、必要な要素だと思いました。

そしてまた、Bさん本人が常々、「いろんな家庭の事情から、一人暮らしを強いられ、生活費を送っていただかなければ、私はホームレスになってしまうんです。だから、ホームレスのおじさん達とひきこもっている私は同じ立場なんです。」と口にしておられたのを思い出すのです。

私は、こうした方たちへの社会全体の理解が、もっともっと深まってほしいと心から思います。

ところで、「風まち喫茶」を利用されている方の中には、地域の方たちもいらっしゃいました。学生さんたちや、少数ではあるけれどもコーヒーを飲みにきてくれる近隣の一人暮らしのおじいちゃん、おばあちゃん、また仕事中の営業マンの方や近くの会社の社長さんたちなども訪れていました。そして、そのような方々の中には、この場を通じて、ホームレスやひきこもりの方に対する偏見がとれてきた、と言ってくださった方もおられます。しかしながら、残念なことに地域の大半の人々は、まだこの喫茶店に入るのに抵抗があると言われる方が多く、新聞などで取り上げられるとクレームを受けることもありました。そのような時は、辛い思いがよぎりますが、「イエスがこの場にいたら、どうしただろうか。」と祈りました。

人間は、時間をかけて対話していく中でこそ、お互いに理解しあい、少しずつ互いの心が溶けて、近づくことができるのではないのでしょうか。そうすることで、どんなに小さくても暖かい繋がりが生まれて、お互いが寄り添いながら生きることができるようになるのではないかと思うし、またそのことを願わずにはられません。難しいかもしれませんが、私はこれからもあきらめず、社会に偏見をもたれている方たちと、教会や、地域の方たちとを繋いでいくネットワークを、作り上げていきたいと思っています。

<スープの会 ホームページ>

<http://www1.odn.ne.jp/soup1994/soup/>

## 心の悩みについて「べてるの家」から学ぶ

### 1. なぜべてるの家なのか

#### ーべてるの家を通して「心の悩み」を考える

べてるの家は、北海道・道南の浦河町にあり、主に精神障がい者の就労支援、グループホーム等の住居提供、出版、農産物生産、販売などを行っている、社会福祉法人与有限会社から成り立っている。べてるの家の詳細や特徴などについては、イエズス会社会司牧センターが発行する『社会司牧通信』第131号（2006年4月）においてもレポートされている。

\* <http://www.kiwi-us.com/~selasj/jsc/japanese/bulletin/no131/bujp1311.htm>

なぜ、このような地方の精神障がい者関係の組織を紹介するのか。べてるの家の理念のうち「三度の飯よりミーティング」というものがある。ここでは、数多くのミーティングを通して、自分自身について見つめようとしている。これらべてるの家での取り組みは極めて特色のあるものであり、またそれぞれのメンバーがそこでの取り組みを通して、いままでなかった視点から「精神障がいの新たな側面」を見出そうとしているからである。それは、病気を、自分を脅かすものではなく、外在化を通して研究の対象として、自分自身に生かそうとする取り組みである。

最近「当事者研究」（後述）という取り組みを通して、自分自身の考え方・感じ方等がどういう構造を持っていて、それとどう付き合っていくのかについて研究している。

べてるの家は、精神障がいの当事者がどう現状に向き合うかだけでなく、精神障がい者でない者にも大きな示唆を与える。彼らが何に困り、行き詰まり、どうすることがよいのかを発見する過程での気付きは、障がいを持たない者が障がいを持つ人とともにどう歩むかを求められる時に理解を与えるものであり、このことを通して、障がいについての理解を深められるからである。

「精神障がい者」というと、「精神保健福祉法上に規定される特別な人々」でちょっと普通の人と違う人たちという印象があるかもしれない。すぐ大声を出すとか、奇行が多いとか、そのような類の一方的な印象が

世間にしっかりとしみこませられている。しかし、べてるの家で実際に出会ってみると、あるいはべてるの家の記録を読んできると、実は精神障がい者の生き方やそこでの苦勞からの気付きは、障がいを持たない者にとっても生きていく上で必要、かつ忘れてしまっていることであることに気付かされるのである。

前述のように生きる上での葛藤を通して自分自身を知った（知ろうとしている）彼らの姿は、私たちに大きなヒントを与える。このヒントを通して、私たちが住むそれぞれの地域で、教会で、どのような方法で、またどのようなおもいで「心の悩み」を抱える人、特に精神にかかわる病を持つ人とともに歩むことができるのかを、「べてるの家」の実践を通して見つめてみたい。

## 2. べてるの家の概要

べてるの家は、浦河日赤病院の精神科を退院した人たちが、「どんぐりの会」を組織したことから始まっている。1980年には、日本基督教団浦河教会でのメンバーの生活が始まった。

当初は、べてるの家理事でこの家の立ち上げに寄与してきた向谷地生良氏（ソーシャルワーカー）によれば、日赤病院精神科病棟退院者は、病院周辺で日中からアルコールに酔いつぶれ地域住民とトラブルを起こしたり、パトカー、救急車を呼んだりトラブルに事欠かなかったという。また当地は、アイヌ民族出身者、また強制徴用によって来道し強制労働させられた朝鮮人の存在等、民族差別の中であって、依存症の連鎖に陥っている人たちの存在もあったという。これに過疎化が加わっていた。

べてるの家が最初に始めたのは、そうした厳しい現状の中、当地の特産である日高昆布の内職の仕事である。しかしある事件によって、その内職の仕事はなくなり、自前で製造販売に乗り出していく。この困難が、地域で困難を抱えながら商売をしている人との出会いへと導き、今日のべてるの家の方向が決定されたという。今では、ここで、またこれまで活動してきた中で気付いてきたことを基盤に、多種の精神障がい者へのプログラムを取り入れ、そこでの「収穫」から様々に活動を広げている。

先に示した働き場のほか、最近では女性4人が発起人となって「むじゅ

ん社」というCDなどを製造販売する会社を立ち上げた（後述）。当事者研究を通して知った大切なことを基に理念が作られ、ビジネスにおいて利益を追求しながら人を尊重することは「矛盾」することからこの名前が付けられた。ヘーゲルの「世界の本質は“矛盾”である。“矛盾”があるから世界が発展する」という言葉からも来ているらしい。

こうして「べてるの家」は、これまで大切にしてきたことを生かしつつ、新たな側面な気付きを、新たな試みに生かしている。

## 3. べてるの家での取り組みから「心の悩み」を見つめる

### 一かかわり、つながりの理念

ここでは、べてるの家での「べてる理念集」というべき様々な取り組みでの気付きにかかわる名文句から、その理念が見出された経緯と、それが「心の悩み」を抱える人にとって、またそうでない者にとって、どんな意味を与えるのかを見てみたいと思う。「べてるの理念集」には、多くの示唆に富む言葉が満載されている。ここではいくつかのキーワードを取り上げて、べてるの家のメンバーや向谷地生良氏の言葉を彼らの著書からも借りつつ、考えてみたい。

#### ①「苦勞を取り戻す」

「心の悩み」を抱える人の多くは、かかわりでの困難さに直面しているといえるように思う。誰も自分の本音を語れる人がいないとか、生活するうえでの他者との関係がうまくいかないとか、こういうことが背景にある。

べてるの家では「関係性」を重視する。それが、「苦勞を取り戻す」「弱さを絆に」といった理念に現れる。

べてるの家のメンバーには、社会的入院（本来退院できるが、その患者の家族等の受け入れ先の状況が整わない等のために入院を余儀なくされること）のために長期間社会とのかかわりを断たれていた人が多くあった。現在でも日本の精神医療の現場では、もう何十年も必要のない入院をしている人がある。また必要以上の投薬によって思考を鈍くされたりと、いわば「苦勞を奪われた人」だったという。言い換えれば、「かかわり」を拒絶され、孤独に追い込まれた者といえるのではないかと。



「苦勞を取り戻す」とは、そうした本来人として直面する苦勞を奪われてきた存在を、一人の人間として尊重のうちにとらえなおし、一人の市民として、貢献できることをしていくということを通して、取り戻すということであろう。同時に、苦勞を感じたとき人は誰かに相談したり、自分の状況を話すことが多くなり、また体調を崩せば人は病院に行くように勧めたりして「かかわり」を持つことになる。べてるの家が、利益がほとんどないながらも商売を重視するのは、商売は人とつながっていないとできないからだという。

## ②「弱さを絆に」「場の力」「個人苦から世界苦へ」

べてるの家の多くのミーティングでは、「かかわり」について、自ずと焦点が当てられていく。自分の苦勞をそこで分かち合ったり、あるいは自分の苦勞自体に焦点をあてて、仲間とともにそれについて話し合ったりすることは、「かかわり」なしにありえない。

ミーティングには、一週間の体調、良かったこと、苦勞したことを語り、同様の経験者にアドバイスしてもらうこともある「金曜ミーティング」、ロールプレイを使ってコミュニケーションの練習をするSST（生活技能訓練）、統合失調症の仲間の自助グループであるSA（AAのステップが参考にされている）その他、毎朝のミーティングなどがある。

最近の試みで注目すべきミーティングが、「当事者研究」である。これは河崎寛さんという当事者が、親への要求が通らないと、物は壊すわ、実家を焼くわと大暴れをして「爆発」を繰り返し、両親をほとんど困らせた青年との出会いから始まったという。

べてるの家の向谷地氏は彼にこういった。「これだけ暴れる人は、生きるエネルギーが満ちている証拠だから…。(中略)自分の助け方を学ぶチャンスがあれば、もっと別な生き方ができると思うんだ」<sup>1)</sup>。この後彼は浦河に移り住んだが、「爆発を抑える」薬を「しっかり悩めることを邪魔しない」新薬に交換し、「順調に」悩みはじめ、爆発し、とうとう病院の公衆電話を壊したという。

この時の向谷地氏（日赤病院のソーシャルワーカーでもある）が、気落ちしている河崎さんに言った言葉は印象的だ。「残念ながら、これは順調すぎるくらい順調な苦勞なんだよ。つらいときや困ったとき、どう

しても今まで使い慣れた得意の方法に依存してしまう。でも、それが一番使いたくない方法だとしたら、ほかの方法を見いだして、得意にならなくてはいけない」<sup>2)</sup>。そして、この爆発について、自分自身の欠点や弱さをいかに克服するかでなく、爆発をテーマに研究し、「世界中の」爆発に悩む人を救出することを提案したのである。爆発のメカニズムを研究し、それとの付き合い方の研究が始まった。

こうして始まった当事者研究は、自分を変えることを目的としているのではない。ある人は、これは甘えを助長するもの、あるいは発達を阻害するものと言うかもしれない。しかし、人は人として歩む中で、弱い部分を背負って生きていかないといけない。どんなにあがいても、それを変えることはできない。それが「弱さ」なのだ。どうにか訓練や精神論で変えられる「弱さ」は本当の弱さでない。ここでの爆発も、爆発をしないのでなく、爆発の仕方の研究だったわけである。今まで研究というと、専門家が行うものと決まっていた。これを自分の持っている経験と知恵を基に、受身でなく当事者が始めたという点が特徴的な点である。それを分かち合うということが当事者研究なのである。

この後当事者研究は、親子関係、摂食障がい、「幻聴さん」との付き合い方、けんかの仕方（べてるには多くのカップルがいる）、パーソナリティ障がいの研究などと、広がりを見せている。このことは、自分の価値を確認していく重要な役割を果たしている。

これらの研究は、ともに研究する仲間との豊かな安心できる環境だからこそ、うまくいくのだろう。誰にとっても、信頼できない人に自分の核になることを話すことはできないだろう。べてるには、それを話すことをためらわせない雰囲気と、それを言わせる「場の力」がある。

## ③「あきらめる」

べてるの家のメンバーで施設長の清水里香さん（統合失調症）は、「だめなままの自分を受け入れよう」ということにこだわることも止め、「諦めるしかない」と思い、今まで自分が必死にしがみついていた手綱を手放したとき、手放したことで自分にマイナスになるものが何一つないことが分かったのです。苦しむために悩んでいたわけではありません。しかし、悩めば悩むほどこんがらがってきて混乱する。でも、悩むこと

をやめたとたんに、失うものは何もない、悩まなくても失うものは何一つないことが分かったのです」<sup>3)</sup>という。

AAにしても、先に示したSAにしても、自分は無力であって自分だけの力だけでは生きていけないことを認めるところから始まるという。向谷地氏は「安心して絶望できる援助」を目指しているという。自分の力では何ともできないことをゆだねる。もちろんそこには、自分を見守ってくれている人の存在があるからできるのである。

#### 4. べてるの家の語るもの

障害者自立支援法という法律が制定され、また「ホームレス自立支援法」と、最近はやたらに「自立」を掲げる福祉関連法が多いことに気付く。だいたいこういう法律は、就労支援など経済的な自立ができることに重きが置かれている。

確かにノーマライゼーション（障がい者の日常生活を、社会の主流の人々の様式に可能な限り近づけること）が叫ばれ、当事者の自己決定権が主張され、障がい者へのバリアを取り除く様々な施策が行われてきた。ただ、一連の動きには、自分のことは自分で責任を取りましょうといった、何か一人の尊厳を守るというより、ここまで用意したから、あとはそれに合わない人を放り出すような可能性を秘めているように見え、用心しないといけないと思う。

ここまでべてるの家での取り組みを見ていると、もっとも大切なものは「かかわり」あるいは「つながり」である。この言葉に尽きるかもしれない。

向谷地氏は著書で、自己決定とは「自分のことを自分だけで決めない」ことで、人とのつながりを失った「自己決定」は危ういというのである。そしてそれは人が「最も力を発揮できるのは、自分の無力さを受け入れ、さまざまなこだわりやとらわれの気持ちから解放され、自分自身と人とのゆるやかな信頼を取り戻すことができたとき」<sup>4)</sup>だという経験則に基づくと。これもつながりによって支えられることを示しているといえるだろう。

前述の「むじゅん社」は、当事者研究を通して知った大切なこと、「虚しさを絆に」「体と心にやさしい会社づくり」「いつでも廃業」「期待さ

れない会社づくり」「安心してサボれる、潰れる、通える、語れる会社づくり」「命がけの苦勞の体験が資本」という、およそ普通の会社では考えられない理念を基に作られている。個々の状況にあわせて仕事をしていくこと、弱さの情報公開や競わないことを大切にしている。ここでも、自己決定が他者とのかかわりの中で行われている。

「心の悩み」も、同じことが大切なのではないだろうか。一人一人が「心の悩み」から「自立」することは、自分ですべて決定できる力を持つようになることではない。人とのかかわり、つながりの中で、いつも、とりわけ困難なときに自分はどう歩いていくかを知るための「場所」があるということである。

#### <注>

- 1) 向谷地生良『「べてるの家」から吹く風』いのちのことは社、2006年、P.40。
- 2) 前掲書、P.44。
- 3) 浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論 そのままでいいと思えるための25章』医学書院、2002年、PP.116-117。
- 4) 向谷地生良『安心して絶望できる人生』日本放送出版協会、2006年、P.68。

#### <参考文献>（すべて2007年現在入手できます）

1. 浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論 そのままでいいと思えるための25章』医学書院、2002年（2,000円＋税）
2. 向谷地生良『「べてるの家」から吹く風』いのちのことは社、2006年（1,300円＋税）
3. 向谷地生良『安心して絶望できる人生』日本放送出版協会（生活人新書）、2006年（740円＋税）

#### <べてるの家 ホームページ>

<http://www18.ocn.ne.jp/~bethel/>

## おわりに

この冊子を作成して、改めて現代人のかかえる心の闇の深さを感じました。それと同時に、その闇に対して、真正面から真摯に取り組んでおられる実践例もあり、励まされる思いもしました。

また、さまざまなことを考えさせられます。「教会で心の悩みを持つ人とともに歩むこと」では、教会が悩みをかかえる人たちを十分受け入れている実態が浮かび上がります。それは教会だけでなく、イエズス会の他のさまざまな使徒職でも同様ではないでしょうか。私たちの活動の姿勢をまず真摯に反省し、回心を願わねばならない点があるかもしれません。その上で、このような挑戦にどのように応えていくか、皆で知恵を出し合い、協力していくことが望まれているのだと思います。

心の悩みの実例として、カルトと自殺の問題を取りあげています。現代の若者の心の空白に、あいかわらずカルトのような二セの宗教（現代のスピリチュアリティ・ブームも含めて）が介入している実態を思い知らされます。自殺の問題は、時代を超えて日本人のかかえる大きな課題だと思います。

福音の視点からマルコ5章の話を取りあげていますが、改めて悪の働きの大きさ・広さ・強さを感じるとともに、それに負けない協力態勢を作っていく必要性も感じます。

最後に、アミティ・修復的司法・風まち喫茶・ベてるの家などの実践例が取りあげられました。どれも魅力的ですが、教会内の活動ではなく、一般の社会の中での実践例です。このようなものを、教会の中で、あるいはイエズス会の使徒職の中で実践していけるのでしょうか。私たちの工夫が問われているのだと思います。

私たちはさらにこのテーマを掘り下げながら、私たちの活動に生かしていく道を探していきたいと願っています。皆さんの中で、こういうおもしろい活動や取り組みがあるならば、ぜひともお知らせください。その宝をさらに多くの人の分かち合っていきたいと思います。

闇から新たな光が生まれてくるのを祈りつつ。